

新刊紹介

生物—地球環境の科学—南関東の自然誌—

大沢雅彦・大原 隆編集

朝倉書店発行(1995年4月初版, B5判, 202頁)

定価: 4944円(本体: 4800円)

湿潤温帯地域に生活する私達が、野外や日常生活において目にしたり手に取ったりする自然や自然現象というものは、極めて多様かつ複雑である。都会を離れて山岳地域に出かければ、岩石や地層が崖に見られるかと思えば、その上には、様々な樹木や植物が見られるとともに、そこに棲む鹿や鳥といった動物に出会ったりもする。また、海辺に行けば、干潟や砂浜で海をながめながらそこに棲む動物たちと遊ぶこともできる。一方そこまで遠出しなくても、もっと身近な周囲の田園や公園、はたまた裏庭においても、いろいろな植物や動物と接触することができるし、家のなかでは、ペットやゴキブリなどつきあっているといえる。

こうした私達の目にふれる自然の対象物すべてが一体となって、私達の生存に不可欠な環境を提供しているといえる。自然の対象物は、それぞれが固有の歴史をもって今日に至っているが、最近では、都市域の拡大を初めとする人間生活の余波を受けて、急速に変貌しつつあるといわれている。こうしたときに、日頃目にする自然対象物がどのような経過で今日に至り、現在どのような状況にあるのかを、最近の研究成果に基づいて認識することは、環境問題を身近な現象と結びつけて考える上で大変意味のあることと思われる。

このような学習は、自然教育や環境教育という側面とともに、いわゆる社会人教育や生涯教育という範疇にも属するものであるが、それが遂行されるためには、いわゆる学問の世界と一般の人々とを結びつけるよいテキストがあるかどうかでも大変重要な要素である。今回千葉大学の沢・大原両先生の編集によって発刊された本書は、このような狙いから、南関東地域を例に、既存の専門体系にとらわれずに企画されたもので、大変斬新な構成となっている。

本書の構成は、次の通りである。

I. 房総の成り立ち

1.房総沖プレート三重会合点付近の地殻構造(平田 直), 2.房総半島の離水海岸地形から読み取る地震隆起の履歴(茅根 創), 3.房総半島の地層層序と地質構造(大原 隆)

II. 海岸の成立と貝の生活

4.河口デルタの埋積システム—小櫃川三角州の形成機構—(斎藤文紀), 5.干潟と砂浜における貝類の分布と生活(黒住耐二)

III. 植物の変遷と生活

6.植生の地史的変遷(辻 誠一郎), 7.湖底堆積層に秘められた歴史と環境変化—霞ヶ浦の生い立ち—(井内美郎), 8.浮葉植物ヒシの成長特性(土谷岳令), 9.雑草群落の遷移(中村俊彦), 10.身近な植物の生活—都市雑草群落の構造とその生活—(大塚俊之)

IV. 身近な動物の生態

11.谷津田の自然とアカガエル(長谷川雅美), 12.都市の鳥たち(斎藤隆史), 13.都市とその周辺のペットたち—関東西南部地域の事例から—(平田 久)

V. 森と動物のかかわり

14.房総の森に生きるシカの特長(落合啓二), 15.房総丘陵のニホンジカによる植生へのインパクト(蒲谷 肇)

VI. 人の営みと自然環境

16.先史時代の人類生活と自然破壊—茨城県生方郡麻生町於下貝塚の例—(加藤晋平・袁 靖), 17.歴史時代の人間生活と自然環境(岡田茂弘), 18.農村生態系の指標としての里山(藤井英二郎), 19.人為による植生の変貌と多様性の保全(大沢 雅彦)

これらのタイトルから想像されるように、本書に含まれている話題は、雑多といえるほど多様であるが、これは、日常生活で接する対象をできるだけ取り入れようとした編者の方針によるものであろう。読者は、興味のあるところから気楽に読んでいけばよいのであって、身近な生物を中心に環境問題をマルチに取り組んでいこうとするのが、本書の狙いであり、特徴であるといえる。身近な自然や環境問題に関心のある人に、是非座右において欲しい一冊として、本書をお薦めする次第です(徳橋秀一)。